

きらり

令和8年 7月

舞鶴市立倉梯小学校

通級指導教室 64-0227

揺らぎに寄り添う物語

絵本を開いて友達や担当者と一緒にお話を楽しむ経験を積むことや、言葉の意味を考えたりお話の展開を把握したりする学習のよさについては、このおたよりで度々お伝えをしています。昨年度は、「じごくのそうべえ」など落語絵本がブームになっていることや、掛け合いの面白さについてお伝えしました。

絵本選びの際、子どもの興味関心に添うことは大前提ですが、通級指導教室では、昔話に触れる機会も大切にしています。

「三まいのおふだ」の話を読みました。最初は、ふつうのおばあさんだと思っていたけど、やまんばだったのでびっくりしました。小僧を追いかける時に川が出てきて、その水をやまんばは全部飲んだし、砂山もすらすらと登って追いかけて、びっくりしました。やまんばは、何がしたいのかと思っただけど、小僧を食べたいのだと分かりました。お腹が空き過ぎて仕方ないのだと思いました。お腹が先生が絵本を読んでいる声もこわかったのだ、こわさのレベルが上がって、もっとゾクゾクしました。ぼくは、こんなやまんばに追いかけられたらトラウマです。こわい話をもっと見たくないです。でも、こわい話を見たい気分になったら、また見たいです。次は、もっとこわい話を見たいです。でも、実際にあったらこわいです。

この感想文は、先日「さんまいのおふだ」を読み、みんなの心が揺さぶられ、ある児童が一気に書き上げたものです。小僧さんは一体どうなるのだろうとドキドキしつつ、やまんばの気持ちにも思いを馳せ、小僧が無事に帰ることができた結末に心底ほっとした様子でした。

心理学者の大山泰宏さんは、「異界」「ここではないどこかの世界」への興味が、中・高学年から思春期にかけての子どもたちの発達にとって重要であることを指摘しておられます。その時期の子どもたちは、認知機能の発達により、自分自身のことや、現実的な未来のこと、他人の気持ちを推し量ることに目が向けられるようになっていきます。それまで、純粹無垢な世界で過ごしてきた子どもですが、自分自身の弱さ・不完全さ・人には言えないようなことなど向き合い始め、子どもと大人との境界で大きな揺らぎを経験します。子どもにとって、これは大変な衝撃です。この揺らぎの時期を耐え抜くための支えの一つが、「異界」「ここではないどこかの世界」だと言われます。言葉にできない違和感のある異界



の物語に触れることで、子どもたちは自らの内面の揺らぎを外界に出し、落ち着いて眺めます。そのことを友達と共有することにより、「この揺らぎの中、自分は決して一人ではないのだ。」という安心感も得ます。これは、人が内面の問題や葛藤と向き合うためのプロセスでもあります。

8月・9月に、担任の先生と担当者がお話をする機会を持ちます。通級指導教室での指導のねらいや、学習の様子をお伝えします。



